

『言水
追福
海
音
集』

雲英末雄

本書『言水・海音集』は、享保七年九月二十四日、七十三歳で没した言水（言水）の一周忌追善集である。編者は言水の跡をついだ金毛齋方設。上巻には言水の墓と画像を巻頭にかかげ、以下門下・知友・遺族らの追悼発句や連句を載せ、また言水自身の発句や連句を収め、鬼貫の追悼句「朽もせぬ石に袖なし花す、き」でしめくくる。下巻には扇風子・山鶴子らの追悼句を巻頭にして、編者方設が収録した其角・嵐雪・鬼貫、または貞徳・立圃などの逸話や俳話を収め、言水ら一座の連句、門下や路通らの追悼句を収録している。

以上は本書の概略だが、上巻に載せられている言水の伝記は貴重なもので、大いに注目すべきであり、また上・下巻に収録の言水に関する資料も、いづれも信憑性が高く、言水の経歴や作品を論ずるのに無視できぬものを十分備えているといつてよからう。

かように本書は、言文研究に欠くべからざる基本的な資料であるが、今まで翻刻されることなくおかれていた。このたび、豊かな紙幅を得て、架蔵の一本を翻刻したいと思う。

なほ編者ノ設は、言水の跡を継いだ人物、その略伝は、「俳諧家譜」(丈石編・宝暦元年刊)に「金毛」として「芳沢氏、言水没後属方山号ヲ方設。後再改金毛。又稱芳充翁。家書有海音集。延享三年丙寅十一月廿六日没、壽八十」とある。

最後に底本の書誌をしるせば以下のごとくである。

書型 半紙本。上下合一冊。袋綴。

表紙「地」巻の表紙を使用して合一冊に改装。「地」巻の表紙は

原裝。薄縹色無文表紙。縱二・五糎×一六・二糎。

題簽 原題簽、中央無辺「言水海音集地方設撰」。

匡郭なし。

柱刻上卷……「海序二」(「海序五」)、「海上二」(「海上三」)

「海上二二二」(丁付ノドより)、「海上三」(「海上七」、「海上八九」(丁付、ノドより)以下同じ)「海上十」(「海上廿七」)、「海上又廿七」、「海上又廿八」(「海上廿九」)、「海上四十三終」。

下巻：「海下一」（丁付ノドより）にあり。以下同じ）（「海下四十九」、「海追加一」（「海追加三」、「海跋一」（以下丁付柱にあり）（「海跋三」）。

丁数 上巻：五〇丁。下巻：五五丁。計一〇五丁。

序文 「享保八のとし中律中句／言水堂金毛齋方設」。

「止々齋麒麟風撰」（年月日なし）。

跋文 「講習堂人昌迪」（年月日なし）。

刊記 「享保八辛卯年孟冬中浣／京堀川四条上ル町松葉軒／書林

今井十左衛門板」（下四十九丁裏にあり）。

印記 下一丁表に「田氏文庫」「岷江亭守田翁考鵬」とあり。

備考 底本では「天」巻の表紙を欠くが、早稲田大学図書館蔵本の

題簽には「言水海音集天方設撰」とある。ただし該書は下巻一丁か

ら二十七丁までの本文に、上巻の表紙をつけた欠丁改装本である。

本書の板下は編者方設自身によるものと思われる。いま本文の半丁と架蔵の方設（金毛）小色紙（縦一二・〇糎×横一一・一糎）を図版に示して板下筆跡の参考に供したい。

なお翻刻は、以下のとき要領に基づいて行なった。

一、漢字および仮名の表記は、できうる限り現行のものに改めた。

一、仮名遣い、濁音等は、すべて原本通りにしたが、改行はかならずしもそれに従わなかった。

一、裏移りを、「丁移りを」で示し、原本の表記と丁数を示し、その表・裏をオ・ウで記した。
なお印文の解説には水田紀久氏の御教示を得た。記して謝意を表します。



誹諧乃部

鷹司前関白房輔之めりて
るをとりて

花文松

わがつやさうの香ひ小玄系 言水
あふるゝ引草の肉 御
かゝ子のゆひさ 線
啓者の山紙て

修土の一念赤きるの秋おや
とろ 赤い線



言水海音集^天 方設撰 (題簽、早大図書館蔵本による)

海音集序

先師は所^コ以伝道受業解惑也^予。壯年の比は梨柿園信徳門に遊ぶ事年久しく信敬長丸雨伯嘉舸如翠永瀬此輩とひとしく誹諧の伝授口決を請て鍛練をこたり」(海序一ウ、一オは白紙) なく交りをなし年ことの歳旦信翁在世の間はかならず組つらねて誹の鋒をいそう此時より近頃までは予誹名金毛と号^ス信翁世を辞して後はひたすら紫藤軒言水に随ひて益この道の妙処を深く学ひ毎句」(海序二オ) 清新変態一句の風姿朝に聞て夕に吟ス終に唯授一人師弟の約を堅ふして常に道を説に残す事なく世々伝来の秘決奥義を口授有て耳底に徹す師日我なくならん後は道統を継^キ我名の空しからざることを」(海序二ウ) 偏にたのめりと有事年月を重ねぬ然るに先生はからすも病に臥す天年の終にや諸医の術尽き雲にとふ葉の届かぬ去年木染月しもつきに卵塔一掬の主となせり死後に及て世に稀なる秘奥の写本のこらす伝り」(海序三オ) 猶家の花押文台硯に至るまで悉我許に譲られぬ誠に師恩の深きこと今更云にや及ふ泰山を低しとし蒼海を浅きにたとふは未^レ尽せずや其器物を見ては昔をしたひその筆をみてはそ、ろに涙を促しぬ」(海序三ウ) 今漸一廻り近く成て都鄙の秀才好士の重玉次には門葉の輩終焉の時より追悼の句そこはく積りしを集て号^ス海音集^ト先生の旨世に高く吟詠千古に流る四方の国々へも便り求て知せなは句の集らん事」(海序四オ) は汗牛充棟成へし只心さし厚く聞

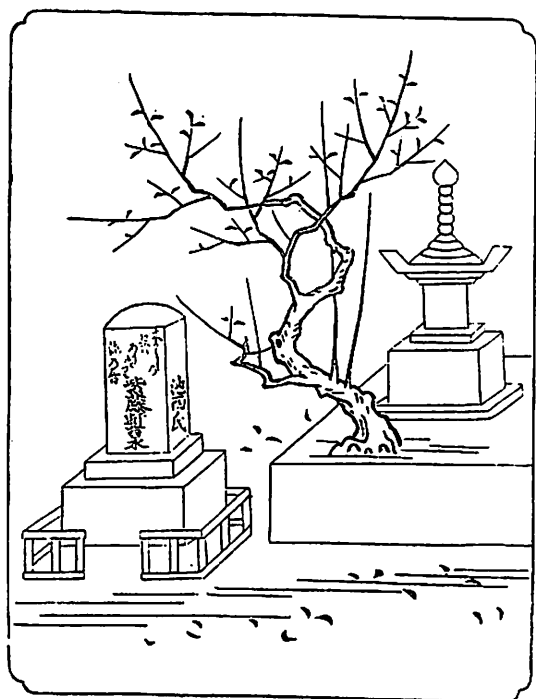
伝に到る所の句而已を書つらねて此集のほいをとけ手向草となし芋ぬ初の師に閑雅の古義を学ひ後の師に花実の新義を極め又としをつみ功を重ねて自然の工夫なき」(海序四ウ)にもあらず句中に画有画中に誹あるの妙此道を知人は知へしもとより無礙自在は誹諧の詞華言葉今唯無何有の郷に遊び広莫の野にたのしみて誹の大雅をしたふ時成へし」(海序五オ)

享保八のとし中律中句

言水堂金毛斎

方設

「印」(金毛斎)「印」(方設)」(海序五ウ)



(さし絵)

木からのし果はありけり海の音
池西氏
紫藤軒言水

「(海上一オ)

(さし絵)

題

紫藤軒言水隠士像

和歌誹諧

何忍狂懷

言水得妙

独鳴詠街

巨妙子「印」(天心)



「(海上一ウ)

亡師常にいへらく死する期は計かたし煩勞していへは元に成かたき事も有へし我木枯のなくは人生のあらまし二つの海のこゝろも述たり此句を辞世とすへしと申置れぬ干時丑の冬中風口噤恍惚として後は四肢不遂言葉又曾而通せずして終寅九月廿四日七十三にて卒すはたして其木からしを辞世にして自筆をうつし彫て和泉式部軒端の梅の下陰に石のかた代を築く誠に抵法師の箱根の湯本にて末期」(海序二オ)に玉の緒よ絶なはたへねの古哥を吟せられしも此類なるへけんや且言水居士画像に紫野大心和尚の讃辞を給ふ謹而これをそのままに冠らしめ此集の規模とす」(海序二ウ)

九月廿四日言の水の手向にならとはとて

行秋は取とむるとも五六日

池西言水九月末四日身まかりける

よし漸程ありて聞えけるに予も

誹の旧友なれば往古彼法師か撰た

る一集をおもひ出て

涙そふ東日記やかたみ草

十徳にもろき紅葉の嵐かな

拝さるゝ字や鼠尾花の小くらかり

人なくて鶏頭の類なみた哉

さしかたの櫓ことつてん秋の雨

池西言水長月下の四日身まかれる

白童子

露沾子」(海上二ノニオ)

沾梅

沾薄

野渡

立圃

よしを聞てかの木枯の果はといへ
る其世の佛の今みることくしたひ
おもはれけらまし

風を待たても池藤枯果ぬ

甘露白」(海上二ノニウ)

海音集百韻之序

天地無尽。在其中者。又無尽也。無尽故時々刻々新物也。水之流也。一瞬不息。来水」(海上三オ)非往水。穿乎彼則有焉。堀乎是則有焉。彼水非是水。是水非彼水。水水新水也。若来水謂之往水。往水謂之来水。則非知乎水者矣。時々刻々皆新水也。人之為言也。一息有言。言々非陳言。吟乎彼則有焉。吟乎」(海上四オ)是則有焉。彼吟非是吟。是非吟。言々皆新言也。若彼吟謂之是吟。是吟謂之彼吟。則非知乎言者矣。」(海上四ウ)言々無尽而新言也。紫藤軒言水翁。池西氏。而京師人也。自幼風格不凡。蕭散內無寸事。忽弃生理。而好」(海上五オ)和歌。遂遊群林。而如脂葦。流覽盤遊。淹薄稽固。胸富雲夢。眼分汪漕。江山為助。神物為護。自是奇句感人」(海上五ウ)新言驚世。世人醉其言。而推奉函丈。翁不待已。而遊其席。已過古希。一日淹病滯疾。近有起色。郡生大喜。」(海上六オ)一朝藏舟。長眠泉式部隣。知與不知。莫不驚歎也。余不勝哀惋。因屬五七言。而享靈座。緒君依余句。遂為」(海上六ウ)百聯。奇句新言。不違水翁

之風。則知師之導也。使學者。画其才矣。頃同志請序於余。余何言焉。言々如レ水（海上七オ）而是新。則宜哉称（スル）言水翁也。余何言焉。余何言焉。於是乎題

止々齋麒麟風撰

「印」（克己）「印」（不明）（海上七ウ）

追悼於誠心院興行百韵

有かはと千草の原や無漏の露
暑寒の峠鐘ももたる、
果見よの月の入かた海更に
蟻螂に砥は求めかねたり
鞍とれば涼めと牛の合点して
堤つたひに撫子の友
すめる代に匂ひことたる松なれや
障子百間むらもなう曙ケ
雪の日の山の額は梳ねとも
箸をくれよとよむ筏士
鴨鶏の土圭の埃を拭ふたり
暮すきにし天雲をひたすら
甘ほしの漸仏法に味か付
秋つかまつる名は御取越
三日月の美しく出る箱箒箭

止々齋
津譜
方設
都菜
瑜動
言石
巨口（海上八九オ）
竜谷
大圭
道山
可耕
羽紅
知石
由白
棹歌

銀の要に座中か、やく
幕をきる面のはこひは静也
国に一峰二神とほしき

不思議なる微笑のと、く舟よそひ

性空などに似たりけり恋

情には花の硯のてりかはけ

末摘顔てつ、し——へ

二けふ己午山をひきさく鈴の音

世間の杖のせ、る漲

取むすふなるまい公事を小草の葉

質に請なし流さぬを露

傾城二育てみたる渡り鳥

指さす眉根測明か秋

名月の碑を尊める浪の外

縁なき御座へぬき捨る沓

ほつきりと箏てこそ鹿の声

願ほとく日は充るもよし

撫で見て神代の味を白の肌

搔へ白玉むかし語れば

月切の隠逸あつて柱わたる

たしかにもせぬ髯を愛する

二ッ衣々に森の小鳥耳に立

友元（海上八九ウ）
執筆
氷花
里右
暮四
晩山
鞭石
郁丸
正元
方山（海上十オ）
柳生
畔里
我舟
水色
方設
都菜
巨口
羽紅
大圭（海上十ウ）
竜谷
友元
譜

襟にあふきをさして柏掌
 入齒師は笙の名利を請合す
 帯れは更に乾鯉の太刀
 棟上の夜はさひしき冬の星
 おもしろ刈^ル辛崎の蓑
 末の子も只人めかすはしり書
 か、けさせたる朝の卯の花
 隣には目のはなされぬあき家にて
 甲子の秋の暮の詩かるた
 毛ぬきして斜雁をねらふ計也
 帆に二三人匂ひ出る月
 島に花鳥居にのこる皮肉骨
 柳にさめる大君の酔
^三糸遊の傘をおはゆる京境
 知人ありや草はろうさい
 遅参遅吟けふのむらさき御免なれ
 袋から出すやらになひかす
 わかれては昼寐にうつる思ひ也
 文を紙縷にうつとしてき翠簾
 母の前老女を若う舞て見せ
 火箸もからす千々の田楽
 此庭の松よりひきし日枝の嶽

可竜
 氷花
 方山
 可笑
 可耕
 追山〔海上十一才〕
 棹歌
 由白
 晩山
 暮四
 知石
 方山
 埴動
 正元
 郁丸〔海上十一ウ〕
 鞭石
 巨口
 畔里
 水色
 知石
 鞭石
 友元

咄しなから書す、に引文字
 真砂地に飛^テてころひを翁丸
 或は左右によつて鳥拭
 板橋の落たる音に藪の月
 鶏頭に顔誰まざなこと
^{三ウ}御侍露を尋て返事なし
 埃まふれの義興の宮
 しやほんにて揖へ名残を吹てやる
 さらは――の跡は蚊の声
 奥の間は有明の火のしらけさる
 ちきれた錮拝ますも花
 待て居る中にはれ行雲霞
 傀儡師より嫁の相談
 下陰は二月に冬を貯る
 砂子の余り盆石に振
 乞能に稽古のほとはみえにけり
 商人の氣によりそはぬ秋
 知恵の輪の三年すきて月す、き
 捻られけりな御すまふの乳
^ナ詫宣にうつろふ浪の花盛
 汚してかへす^{アツカ}王十端
 うたふなる両馬のあいへ石の竹

方山
 晩山〔海上十二才〕
 竜谷
 大圭
 追山
 郁丸
 友元
 方設
 言石
 由白
 暮四〔海上十二ウ〕
 巨口
 水色
 柳生
 氷花
 可耕
 都葉
 友元
 棹歌
 竜谷〔海上十三才〕
 可笑
 畔里

雲無心にてくきらかくせる

五条あたり——を尋ねけり

つる／＼釣瓶千金の雨

むつかしき勅の謎をは説あけて

灯細く漿鉄匂ひ来る

ふつつりをよろこぶ代々の入間川

産事を得たありきやう也

人々の目にさし渡し紋所

不断を側に小ゆひ万歳

片岳の松は地をはふ朧月

今の莊子か虎杖をつく

^{ナウ}童は飴を拾ふはるの色

鐘一本で楽に喰てゐる

三むかしも過た袴は直の出る

しらぬもとはす洛外の柚

六月に年玉寒し小野、炭

八幡殿の果報いみしき

空五七寺前も五七花の膝

いやひこはへて鶯の宿

知石

棹歌

巨口

可竜

大圭

暮四

棹歌〔海上十三ウ〕

方山

正元

遣山

郁丸

都菜

棹歌

由白

畔里

暮四〔海上十四オ〕

遣山

鞭石

知石〔海上十四ウ〕

ん爰に池西氏の翁とは我と齡も同

し程にして更に隔る心なく語り侍

りし友也この人いつの比よりか不

快の沙汰只かり初のことと思ひし

を終に長月廿日余り四日に身まか

り給ふよし告来るに驚き侍りて年

来の現は夢に秋のくれとおもひ定

め侍れと愚の涙とまらす侍れは又

聞やいな袖かき曇り露時雨とつふ

やきなからおもふに此人こそ日比

正直に猶仏の事疎ならず勤給へは

必定今は安樂の国に至り給はんこ

とを察して

月と人何ンカ去ル西へこそ

応々翁 方山〔海上十五オ〕

紫藤軒老翁五七日の追悼の会方設

のぬしいとなみ給ひける日は故障

ありて得まからて明の日誠心院の

墓に詣て手向をなしぬ

あたらしき古人の涙霜の跡

雲鼓

追悼

長夜に友先去ぬ残、年我幾何なら

行水の流は絶すされともあたるは
もとの水にあらすそれにやとれる

月影は動すしてかはらす人は娑婆
に走りてはかなくおはるこゝに紫
藤軒言水は唯かり初のことく云つ
ゝ終に無常の烟と成給ふされとも
彼風の妙句は世に止りて人々感心
す

木枯の果やその身も西の空

あはさらん此世の隣秋の梅

空言や水に数かく稲の妻

めくる日の窓に答よ露しくれ

世の中の果は有けり柿紅葉

月花の人は暮けり秋の藤

世に鳴し其跡なくやきりくす

両吟

青麦や折く杖に石の音

世はよし雀よしや世の中

三ヶ月の四日のふとり末かけて

ものあたらしき酒のこゝろみ

封し月の薄曇になる秋の寂

紅葉合せはとの山か勝

桑門友元(海上十五ウ)

五吟

而后

流枕

ト志

又下

眺笑(海上十六オ)

止々齋

言水

全

止

全

水

ウトモ
伴の男とくすねも熊の躰しらむ
五尺の氷柱三尺の雪

常盤なるうき世か雨にぬれ仏

飯櫃兀て鼠鳴るゝ

塩鯛の牙に臥龍を思ひ寐も

千変万化菊の詩工

夕陽の月は合体神路山

逆波うつておよく身の冷

湯女か櫛かりおふせたる一步也

笑ふてさゝせ給ふ倂

花の情宇治の蜚に散替て

涼しや鱸篠の葉の上

紫藤軒南都へ引うつり給ふ
餞別

栄へ見ん古郷の杖を藤の尺

わすれ草摘何くの礼

益良男の又あたゝかな雉子提て

牛十二日迄御好也

川音の近う聞ゆる月の暈

おとらぬ里も稲の初花

ウツク
穴太の願は破つて真葛原

全(海上十六ウ)

止

全

水

全

止

全

水

全

全(海上十七オ)

止

全(海上十七ウ)

方設

言水

全

設

全

水

全(海上十八オ)

母にすげさせ又履て反ル

後朝に帶尋るは白家鴨

船賃なくて小刀をぬく

何事を何たる富士をふし拌み

織縮ぬる朔日の雨

彼はとして爰にて止め

紫藤軒の翁七十三にして此秋黄泉

の客と成給ひぬ惜哉予とは久しき

睦にて水魚の交りふかく一入悲歎

の袖をしほりていさ、か拙句をつ

ゝりて拈香するものならし

うら枯やしたふも名のみ池の雲

野送りとたまなき宿にからよもき

風の果見に行か秋の人

音信と古き都の枕鹿

真実に暮行秋そとめられす

錦さる木々の行衛やもとの土

月入てゆひのありかや石の面

世の時雨池の別れとなりにけり

池西言水子過つる長月の下四日に

身まかり給ふよしつてき、て

設

全

水

全

設

「(海上十八ウ)

きのふ見しもけふの昔とふりにけり

しくれてかはる冬はものかは

時しもあれ秋の末野、露霜と

消て悲しき人のおもかけ

紫藤翁の一周には海音と、のひ

侍るを

藤の実に波の果有ゆかり哉

秋こそまされ来る人の弁

した、りの巖に鹿を画かせて

つとく草にあふは久方

太平を目釘に残す世の面

琴を抱くも成都也けり

とり廻し私めかぬ測に袖

小僧を枕にしたり唯賦ス

元服は橘の香を懷に

鍛へる時は痒き束帯

煎したりあんな仕果は網に水

夷も折に鯉釣なむ

夢に風價をまたぬ旅の松

焙しか、るを壺の初秋

了簡者退くことし暑も終に

腕カミにのせて猛きかまさり

道堅

柳生「(海上十九ウ)

暮四

池潜

都菜

方設

如輪

乗風「(海上二十ウ)

執筆

四

潜

菜

設

輪

風

潜

四「(海上二十ウ)

設

月至極杜壇の華火恥しき
 嫁せさる中か踊たのもし
 禿から胸隔にあり波越る
 耳へは借して牛に舂
 谷の戸にひけらかされぬ無地のもの
 一つの智をたのむ骨がら
 飼鳥の舌にこほるも疊の粉
 舞台の跡をみせぬ若草
 左保姫は分て屏風に斜なる
 進んで酌をしてはかけろふ
 しほらしい恩を他筆に忍ふらん
 嗅き事哉此浦の月
 御旅館に殊さらはせをたくましき
 虫の音広し賀の済んだ髪
 晩鐘の尾上を脇に頭巾きる
 淡烟疎雨にまかせたりけり
 流れ巢に雌は喰付船を顧
 風もつはらの街新聞
 時と年日をいふ花の鏡山
 薄は春の字也けり

南菊北梅の地を異にせるもむへ

菜 風 輪 四 設 菜 風 四 設 潜 菜 潜 輪 風 菜
 菜 風 輪 四 設 菜 風 四 設 潜 菜 潜 輪 風 菜
 輪 (海上廿二才) 輪 (海上廿二才)

也けらし紫藤翁言水子は予数席を
 重ねしちなみたりしか八重のみや
 こより諸州に名をひろくけふ九重
 のいつみ式部にいにしへ今の軒端
 を並へとし比の榮をかゝやかせし
 終りなりとそ

木末にも箔あり燭あり花薄
 長と成けれ千々に物こそ
 谷鹿の糧や禹の真似余すらん
 鳥は巢二桜もみちや暮の声
 朝には書のはのす風の露
 時雨ねと軒端の梅や相舎り
 残しけり夜と木枯を笹の隈
 歎き云言葉さへなし秋の水
 晩鐘の鯨もなくや秋の風
 香をしたふ軒端や月に影仏
 菊名残池にうつるや西の空
 木からの沙汰となりけり人の果
 池の芦西へ吹たり鳩のかせ
 名を照す真如の月々四の海
 花散て袖にそ露をおきな艸
 水去る落葉は法のにしき哉

而咲翁 鞭石 (海上廿二ウ)
 金毛 暮四 市貢 可耕 又閑 樂在 文海 盛秋 (海上廿三才)
 梅雪 香夕 友幸 我舟 蘭秀 友幸 本貞

木枯よあ、言の葉の名残哉

法讀 柳 洞

百韻のあけ句や無常九月尽

宗 恵 (海上廿三ウ)

梅寒し目に北時雨の法の音

梅 雫

おしめ人又思ひ出す初しくれ

正 水

ときは木も嗚呼庭やいつの間二

止 水

月ひとつのこすや礫す、め原

古 連

世人猶泣ん枯野、鹿すらも

滴 水

残す名やぬしは軒端に北時雨

秀 水

池利にしや言の葉計水の霜

義 重

人はいさ木の実此世のはなれ口

陶 水

紫藤の主享保七の秋遠行 (海上廿四オ) ありしに

その家の人いたく愁傷せられんこ

とおもひやりて

名の木散もらひ涙や夕机

羽 紅

先哲紫藤の翁身まかり給ひ碑を嵩

宿梅の隣にす誠に死テ而不レ亡者ハ寿

芳イ名いますかことく薫墨其跡に正

しとかや

梅もみちと、まる碑フミや宗匠座

知 石

保羅にほら組月の月草

方 設 (海上廿四ウ)

秋はた、淋しく見るを榮耀にて

羽 紅

盆ほと溜り鳥浴アソビるなり

石

鴉カの風うらはの夕起すらん

設

小春を専と建て竹の香

紅

めくみ有御髭にして霜の花

石

穢れた腕うでで南無観世音

設

まこと皆尽てはもとの薄馴る

紅

仙家と廓地の外の天

石

夜の酔は隣も明スミケす芋イモ更スミむき

設 (海上廿五オ)

一景得たり鱗に黄キナ葉

紅

月は末ヒツ猿田の波の七かへし

石

居にくさに出て源氏尋ぬる

設

男氣を無下になすもの雨の鐘

紅

炷タイたむかしの切キレを今イマ薫カウ

石

鍔ヒル時に覆ふて走る花の髪

設

万マン歳しらへ平野派も打ツ

紅

二をし鮎アサギの口二三枚故語を吸フ

石

藻を好給ふほと成ナ仁

紅 (海上廿五ウ)

節わかき卯坂の杖に数を折

設

奪ウバふて退シユウ事征セイより止ム

石

雲の端のやうに袈束脱シラシちらし

紅

またうせをつて尾にて雪の戸

設

山深ヤマみ加行カキのやつれ冬の菊

石

文フミおさまつて汐に味はふ

紅

矢に始末出来て竿金切こなし

汗の盛りのつめたかり晁

名の月を見にゆく一歩夏の月

抱て去ねとは飛した勅定

うはえ際ふるき軒端にまこも塗ル

勇み有もの朝楊枝かな

君か代は蹴蹴すかすもとろ、汁

水憩ふては既に草の氣

潤ほふは泣の花笠風の色

一トめくり讀中に白鳥

設

石

紅 (海上廿六オ)

設

石

紅

設

石

紅

設 (海上廿六ウ)

言水師の靈前に供ふ

猶よけふこ、の枝にちる名代人

秋なからのり得し蓮の花の上

老葉の果は木からし海の音

軒端ふく秋の手向に花の魂

知る人に風はなし奈良の京

聞人と成ル香は尚し梅紅葉

紫藤軒言水翁は予膠漆の交り深く

道を間に席を重ねぬ去秋貴体 (海上廿七オ) 不豫

の事ありて命数のかきりにや百薬

効なく末の秋廿日あまりに一朝千

其 諺

由 白

柳 生

可 笑

畔 里

可 竜

古の夢と成誠に心傷神驚き悲しみ

に絶す師恩一毫過のふかき事をお

もへは嗚呼シテ涙巾を沾す烏兔押

うつり花飛葉落て已に一回忌に及

ふ袖をしほる中にも香花を備へこ

の一句を手向け而已

秋草や摘によし有忘れ水

紫塵齋泚潜

「印」(紫塵齋)「印」(泚潜) (海上廿七ウ)

花の軒端月の窓を敲しはその人の

おもかけこそおもはるれ

御所柿の独り主なき梢かな

月花の空座尊し秋の露

惜しむへしことは林竹の春

名木も散かゝるなり終の興

言の葉のうら枯けらし水「火」風

人の身の千種にかなし露の月

いひ残す風のすかたや翁草

雲に道人の盛りも花野哉

実は飛して銚は残る台哉

化し世の花の例座や秋の草

池に月西に紫雲やそのゆふへ

大坂志筑氏 常 政

桃 葉

間 朝

芦 水

老 仙

薄 雨

花 雞

喬 翠 (海上又廿七オ)

露 計

遊 笑

秋 霞

眸やあたし落葉の落所

因州鳥取 隣 笛

風やことの葉を世のかたみとは

同 梧 露

散はちれ跡面白き柳かな

全 晦

寐ぬうつ、壁やむかしの蜚

九 間

起て寐る間に咲けり草の露

鯉 階

洛陽や秋は葉にあり八重桜

一 古〔海上又廿七ウ〕

うた、寐に移る色有秋の声

長谷川 市 声

跡の名を軒はに置や露時雨

扇 賀

苔若し孤雲の辺り秋の塚

ヲワカ

亡師言水へむつまじき交り有て此

句を手向給ふ

その一葉銚はかりそ山かつら

丹州峰山 嵐 松

此居士は中にも秋を好れしか

百 合

一声は峰のあなたや夜の鹿

巨 口〔海上廿八オ〕

この道はたえす言の葉も尽せぬ水

茎の跡はかたみとなりて耳にと、

まれるこそ海の音なれ

王雅彦 一 至

思ひ出す顔もほまれや月の秋

貞 芋

武蔵野、露の光りや毛吹草

一 壺

名のみ也藤のたなひく水の月

竹 宇〔海上廿八ウ〕

西海子の裏に種あり海の音

南都より立かへりに皇都へ上り給

ひし時

袖も襦衣裏も桂の木かけ哉

言 水

めを流すへき沢桔梗一房

鞭 石

秋しつか度士は胡箇拵て

晚 山

月の高根を和らかにとめ

暮 四

古町は堅う覚えて雪の幕

方 設

室に春色待て居る也

正 元

俎箸の謙退ありて酢の匂ひ

鞭 石

戸灘瀬に落る分別の外

言 水〔海上廿八オ〕

ほのかにも孺子の後をなめける

暮 四

日々に栄る用達の門

晚 山

わか物に成へき柚かをのつから

正 元

改元触を聞て立ッ燕

方 設

紅白の根は御子はらの分て猶

言 水

筒脚半にて不二を見し露

鞭 石

月夜よし毎朝向ふ湯の盥

晚 山

すなはち雲を形に葺たり

暮 四

此巻もこの句にて各退出〔海上又廿八ウ〕

池西翁を感傷して方設ぬしへ申遣

ス

挽詞

天下に名稻負とり水の跡

麦の芽や既に花なし道は又

海の音の果は有けり枝の雪

散ことの齒にこたへたり梅もみち

寒菊の行義をしたふ夕かな

檣柱ク火は木枯の旅寐哉

紫藤軒言水翁は一たび誹魔を把て

名声籍く甚都鄙に震耀す」(海上廿九才) 誰か是

をあふかさらん而シテ於予此先生の

門に随て契むつましく花鳥風月の

宴林泉窓雪の戯れ折にふれて引立

られし師恩の深き事今已に休魂地

に復する日を暮し夜を明し悲に沈む

漸袖をひたして仏名を称へ一句を

手向て万分一を報せんとする而已

木からしも和して哀婉雅、亮たり

一ッあきて百里泣也雪車子

言の葉の水去芭蕉破れけり

机去年掃けりな花すゝき

石見の国人歴一千年忌に我師言水

もこの世にいまさはとおもひ合せ

て

淡々

大圭

魚川

竜谷

池文

乗風

百十春我人丸もなき世也

住やなれし都の土へかへり花

言水翁いまそかりしあまたの年を

重ねて／＼したしみ侍り去秋末身

まかりけるよし告来し雁の翅雲路

程ありて霜ふり月はしめにかくと

聞えければ

誰そや霜知人もとす水の淡

捨らるゝ身はほろ寒し霜の袖

紫の雲や見及ふ秋の藤

月入て七尺くらき籠かな

をしや雪月のつり合袖に露

言の葉の色や古今の秋の月

絵やはかく其の世談りや水の月

言絶て酢の利つよし秋の水

時に袖紅葉は咲を夜の雨

残る名も絶すたえたり秋の水

松ならはものやおもはし菊の命

菊の香や尋て是は音もなし

水や水雁の便もあるものを

暮にけり吹れし人も秋のかせ

謚はたゝこからし主人哉

石州浜田岡田氏等 水

加藤 松 貞

偏州福山 工部

同 蝶子

可雪和尚

偏中笠岡 可山」(海上卅才)

信州上田 五得

偏笠岡 止候

同 止仰

同 止仙

和州高田 夕松

同 梨袖

同 可笑

同 其峰

同 其中」(海上卅ウ)

同 梅馬

丹波黒井 友志

木枯の果の果聞たより哉

丹波柏原 芦 鴉

たち酒の間にあへ鹿の国飛脚

京 応 信

名はかりや言て萩折手向水

同 岑 翠

去ル人は山のあなたよ闇の月

同 一 塵

池ありて今や承和菊鳥の声

惠 閑

言の葉や梢の秋に折風

丹波佐治古田氏 情 夫

入月に陰徳掌つ草の露

全〔海上卅一オ〕

去ル人日々にうとしと男顔にて

此秋は去年ほとぬれぬ袂哉

田中氏 雲 水

本来無一物

言水と鐘に続し野分哉

全

風の手も尾花も掃や塚の塵

林 蕪

過こし秋師の尋入来ぬ予菊を好み

て育しそれこれの申に分て三十欄

など、愛給ひし思ひ出て

彼岸の風の伝がなきくの銘

羽倉氏 闇 磔

柳散雲に棹さす光かな

井 柳

世の露にひく訝や何の音

公庄氏 我 昔〔海上卅一ウ〕

南都之部

亡師紫藤軒は南都の産にて先祖は千貫屋久兵衛とてつの振に居住して奈良大年寄の職を蒙る然に大徳寺清嚴和尚に帰依し中年の比子息に家職渡

して宗珩と改難髪の時即席

四十年來彈指一程

今釈氏成漂京城〔海上卅二オ〕

朝寄富屋温寒腹

夕入茅窓唱仏名

法の為身を捨舟のうかみ出て

漕はかへさしものとのみきはに

是はこれ酔時の時の放下成へし

かゝる誌もあり其子後は良以と改めこれも和哥に心さし深く侍り夫より

実父柳以は南都を出皇都に引うつりて〔海上卅二ウ〕居られし亡師は

ゆかり有て九才にて東武へ下り十三比より誹諧に深く心をよせ十六才

にて半元服より直に法体していよく誹風を専とせられしか重頼身まか

り給ふと聞て此京へ上り年比爰に足をとめ誹林に遊び星霜を送られし

か難忘古郷や過る子のとし八重桜の下に引越して凡二とせ計住なされけ

とも又九重の匂ひもすて〔海上卅三オ〕かたぐや丑のくれ平城に上り

程なく病に臥終枕席を忘るしかれば南都はゆかりの地にて常にむつま

しき友その外門人も多く有て去年の追悼も一寺に興行あり四十四二巻に門

葉の手向の佳草悉く書つらねて我もとへ送られし其志の深き事感るに堪

追善

木枯の果は有けり海の音

北にしくれの鐘ひとつ鐘

兼題に丁子頭も傾きて

鼓 山

支 流

京はさなから人静也

布引や次第羽疊鷺の松

笠も帆になる川舟の興

月や暮雲の追つく月の邪魔

戦く薄に虫の音をかる

薺の花見ぬ驚は桑の箸

時に則構尺を売る

浅草の御手で御腹をかくそとは

かしくの零山／＼か浮

犁も鋏も弓馬の具にかはる

星また知れぬあけかたの庵

蝕し月を思へは世の示し

萩のきしりは艇さす哥

秋幾つ首に横道の文袋

しひりの別れ淋しかりけり

いつみてもかはらぬものは釈迦の像

三鳥宿す嵯峨の藪垣

漢朝の花も心のあゆみにて

ほとけて水と成てむすへり

嘴の土堤をは恋の産ところ

善悪の沙汰陰陽の業

珠数みせて手炉は嚙行もしほ草

新水

無吟

梅可

可任〔海上卅四オ〕

如水

藤可

一桂

友志

楽之

一簀

加友

可習

執筆〔海上卅四ウ〕

山

流

新

藤

之

簀

桂

任

加〔海上卅五オ〕

鯨て北斗の寒さくもらす

名にしあふ縁の柳もらす水

禿か知恵に金のうはなり

添竹の萩も朝なの力事

退凡下乗みとしろの月

貫之かゆかりを鳴かくつわ虫

われてはすゑに西瓜涼しき

心かく額の角を丸からす

筧とこなせと我か草薺

狙の筈は近し鳩の海

身柱一ツはせなの旧跡

恋せしと伊達藤川の箱伝授

垣越の伽羅武士の罌

閑居して知る暁の水の艶

藁打音か時計かしまし

歌の事安く生る、花の雲

列見の日は何篇を剃る

うら、なく牛に輪廻の角やなき

ぬくみを汲んで清き若水

追善

木枯の果は有けり海の音

志

任

新

山

藤

之

桂

流

簀〔海上卅五ウ〕

加

任

志

之

藤

新

桂

山

簀〔海上卅六オ〕

流

之

流

小春たなひく日昼の花

机窓のこほれの円にて

岨も追に里も優なり

鶴の啼下は黄はめる百町そ

萩のしたりに風折はなし

拙を柄杓に汲んでしし只

露から玉に撰集の筆

ウ ひは鳥の諸羽になつるひえ愛宕

吹すかしたる乗かけの巢

饅頭にみたり実の笑ひ貞

時計の錆を小坊主か負

掃きつた所尋ぬる塵ひとつ

浴して出る追善の会

初音散綴の袋た、ならね

猫の綱とくなさけ中元

此神は山新也松の月

名の有池に秋雨をたす

碁双六心をなけて風の色

料理のもやう目の裏の七

墨染のさくらは霞はやりうた

土筆はいつもかたい出姿

ナ 引帰す小鮎も陰にこそる也

秋水

一滴〔海上卅六ウ〕

独住

瀏鯉

和水

露睡

涼軒

是心

花睡

志楽

芦月〔海上卅七オ〕

執筆

露

秋

瀏

花

滴

涼

是

独〔海上卅七ウ〕

志

和

猿の案内御馬屋の笑

洞眼のわたふく／＼とフワして

ねふかに忍ふ念仏半分

近日に車の役をさ、れたる

十方くれに頭痛かいしき

後なる山は余慶の遊び物

くつわか帰依の臨済の髭

卵をはわらて袂にあたゝむる

墨絵か、りに雪空の月

茶山花にかしこまりたる女の童

隣を聞は吝氣いさかひ

一心に刻む弁天利生有

たすきに漕は沢も湖

ナウ 制札を読尽したる雨の中

兄より弟すんとふけたり

則是也浅黄の腮繡紫衣よりも

水の間に浮た忘れ物

楽しみを極た通り大井川

名残りの霜や草の乳はなれ

花さして各しさる席の程

孔雀も舞ん雉子の一声

名に愛し菊も名残そ霜の花

花

芦

秋

瀏

和

露

芦〔海上卅八オ〕

志

涼

花

独

滴

志

和

露〔海上卅八ウ〕

是

涼

秋

瀏

滴〔海上卅九オ〕

水

南都新

残し置其木からしの陰清し
 冬枯を悲しく鳴や桜鹿
 凧の音はかりにや菊の水
 猿丸の秋は秋なり人の暮
 木からしの名や吹残す石の文字
 咲出せば手向へくや宿の梅
 言草の露に淀なし水の便
 寐すかたやこそる時雨のぬれ仏
 しくれともならてや玉のそほち草
 言の葉の染おふせてや落る水
 小雨た、ほさぬ鳴子の袂哉
 名計や牡丹さひしきわけ残し
 ゆく秋や硯しらる、磯ちとり
 雷光と争ふ露の落てけり
 待てから風に傾く遅稲かな
 さなきたに去める秋や翁連
 散にさへ根から紅葉を風の物
 我袖の露に欠たり翁草
 紅葉たにた、かぬ雨や袖の上
 梅紅葉何そさくらは色ながら
 玉露のみかき仕舞や秋の水
 秋の端や猶耳にとふ鐘の音

同 知 網
 同 梅 水
 同 上 水
 同 亀 三
 同 喜 之
 同 弁 什
 同 八百風 (海上卅九ウ)
 同 東 志
 同 芦 月
 同 支 流
 同 思 外
 同 可 任
 同 一 資
 同 梅 可
 同 無 吟
 同 一 桂 (海上四十オ)
 同 楽 之
 同 友 志
 同 如 水
 同 藤 可
 同 友 丸
 同 一 貞

葉桜やはらはてそほつ秋の塵
 笠かしに火宅や出ん村しくれ
 力なや藝は折れつくれの秋
 葬りに紅葉や焼し都人
 時雨月も影なき人の鏡哉
 山越や暁の白萩迎雲
 百菊や有か中にも籬はなれ
 紅塵の袖やはらふて月の舟
 露か霜かそれかあらぬか噉うつ、
 秋の暮と悟し給ふや雪月花
 飛鳥井の経の雫や露時雨
 惜ても水に根のなき老母草哉

同 花 誘
 同 原 始
 同 紅 石 (海上四十ウ)
 同 玄 糶
 同 白 之
 同 一 滴
 同 和 水
 同 秋 水
 同 芦 月
 同 露 唾
 同 加 友
 同 志 楽 (海上四十一オ)

誓願寺の軒端の梅老師の石碑に向
 ひて
 猶歎く帰り花有誓願寺

同 測 鯉

紫藤先生をいたみ申て翁とし此の
 海の音をつく

行秋やなと凧のはて迄は

小坂氏 梅 七

年来紫藤翁の液涎をしたふて誹林
 に遊へり去秋此道の徳を余に秘よ
 と伝へられしも今更のかたみ

冬の一木散て影なしすくみ猿

同七軒同 鼓 山 (海上四十一ウ)

世に匂ふ菊の帰寂や池の西
言の葉の雫を拾ふ花野かな

水色
正元

紫藤老人近きとし比南都に趣て時
有帰洛して台嶺の雪を賦すその声
残つてその影なし

大ひえも雪もありもの九月尽

軽人

しら菊やうつむきながら雨の声

東郊

うら枯の脚手影なし真珠庵

氷花「海上四十二才」

難波より到来

挽詞

むかし／＼しらぬひのつくしへ趣
れし時難波の泊りにしてはしめて
面を並て去年の秋は四十とせはか
りならんかしそれも今日も皆夢の
倂よかしとみたりに句を述

いつかまた似たもの、似ぬ草の露

無量坊之白「海上四十二才」

言水老師の門に血をすゝるの徒石
の形代かたのことく物しかつ木枯
の一句を刻み歌人某か古墳になら
ふとなむ思ふに不朽の名を千歳に
つたへんとならし

山の端の式部に冬の隣とは

百丸

その名はかりをと、め置てかれ野
、薄に倂を見しふる人の魂を動せ
しは昔や池西言水誹諧に業をたて
、世の中に副ふあかれぬ人の数
にて維舟の流れ汲なからしかも
その舟にも」(海上四十三終才)
つなかれす筆の道学すして佐理道
風か仮名の手もとをおほえ好人よ
く交りを結ふ七十年の後埋る、苔
の上をしたひて今や忘れぬ志に
遊びこのいさをしによる人は何か
し方設也これもすける心さしおと
らすたれかれ月花のかたらひおほ
くして窓軒端をたのしとす我も交
りの庭に曲を交えし友なればお
かしさあはれさ心のはしなからな
き跡の石の面々こそ専なけれ

朽もせぬ石に袖なし花す、き

鬼貫「海上四十三終ウ」

追悼

老の名は菊に残りぬ反古箱

其匂ひ咲にのこりて夜寒哉

名に道はゆかまぬ墨に水の露

気のつかぬ露にあはれを青物屋

逝ものは狂言綺語そ秋のす

をた巻に果は有けり銀杏の葉

漏刻に帰るその日や水の露

曾比花洛に遊んで帰の日 そは切

をうつ手や木曾の友衣と筆して馬

のはなむけせられしも一むかし

短冊にかへる手はなし風の果

右一章

既に諸候大君の玉作を下し賜しは

上巻に書つらね侍りしに追而今又

東武より到来の玲瓏偉句巻の末

なから天ノ部集なしければこゝに

写し奉りて錦上に花を添のかさし

となせり」(海下一ウ)

扇風子

山鶴子

冠雪子

山秋堂
今宵子

露屋主人
如嵩子

波屋子

如夕子」(海下一オ)

卯の春東武より到来これを地の巻
の冠りとなす

先俳江都に有し時はしめて編集

せし事有小冊を新道と名付り

春の草とへは新道五十年

五十より何もない船春の夢

風当る八百韻は江戸さくら

仏手柑に浮世は甘き因かな

江都より九月廿八日に到来これを

以て爰にうつしぬ

したはる、人に一雨梅もとき

袖を煉るも風の果の噂かな

袖にほへ払子の下の密柑味噂

石に筆露ときく日を時雨哉

其ひ、き西に月なき噂かな

茸狩に人はきのふに寺の山

指を折に半は泉とかや言水ひとり

踏止つてふるきをしたふ長たりし

に

秋ことし八百韻も皆故人

願るはかり藤のうら枯

沾徳

沾洲

青峨

江鶴堂
松尺」(海下一オ)

桑々時
貞佐

和風

蔵六

山夕時
仙水

仙科

記丸」(海下一ウ)

仙鶴

方設

煤簾藻屑の月に浸されて

新渡の菓子と昇て出る壺

糊置はきらひやかなる雲ならん

塵のはしめはすへて巳の時

ッ船乗の問答したる会下もなし

不拍子に振る大根の賽

炭火にて宵の間過る化粧見ん

厚くもてなす武士の女房

鉄仙の尼店蒔絵きり／＼す

田面の二日雲更に浮

世の訳の舌にさはらす月を此

おほつかなくも香を捻らん

たをやめの庚申あたり花を待

さはらは落る椿でもなし

恋するをなつけかたきは真葛原

蓋^{タシ}天よりねだつたら金

ニ舞つけたことく椽迄舞余し

あな結構な中にかれ飯

むつかしき錠を集る牡丹持

野守も知すばつと明神

張貫の狸々もあり杖草履

雪の灯籠のうらなくも立

軽 人

芹 生

文 舍

霍 里^{〔海下三才〕}

几 鹿

芥 賀

勢 夫

鴛 来

霍 洲

執 筆

珍 舍

一 路

氷 花^{〔海下三才〕}

仙 鶴

方 設

軽 人

芹 生

文 舍

霍 里

几 鹿

芥 賀

勢 夫^{〔海下四才〕}

闇の香のこの比退くと袖の月

膝へ一葉のうれしさをとふ

乙馬と申合せてかへる筈

奇麗／＼と替て喰けり

めりやすは格別の事あほし折

姫とりよしとひたすらに読ム

ッ氣に入りのなま針¹命は園荒し

細工利めか生す雨乞

鏡卒は輪補をのほる泊り鳥

笑ふか家に成つて伽役

手から手へうつしてしめて花の軸

わかれはしめる紙布にをく霜

嗚呼世上は夢中の夢享保八のとし

九月廿四言水居士の一周忌予にも

発句手向よと方設子のすゝめられ

ければまことに古きなしみにし

こと、も思ひ出て今や蓮台にそゝ

こしき身ふりしておはすらんを見

る様におもひやられて

根に帰れ去年も手向し萩桔梗

面影のひとつのこるや種茄子

鴛 来

霍 洲

一 路

珍 舍

氷 花

芹 生

仙 鶴

軽 人

霍 洲^{〔海下四才〕}

鴛 来

珍 舍

方 設^{〔海下五才〕}

一半時庵主人師恩をおもひてことし其角十七回忌を弔ふ撰集を見るに鰯洗ふ水の濁りや下河原とほくの有古章を得たりと有誠に比筆もむなく成て定めなき事おもへはこれは一とせ其角上京せし折洛下の集加か招請にて新川原町橋やにての発句也予もその連中たりなつかしさに其懷を出し見るに」(海下六オ)

鰯洗ふ水の濁りや下河原

戸のろく／＼にたゝぬ風

旅にあれば独歩きも自由にて

浅黄きはつく帷子の皺

梨子の真はふり力や暮の月

いまたすまふも地取也けり

雲切の降ともなしに山の秋

習ひのまゝに茶巾さはくり

下戸／＼といはれてけふも口惜き

傾城請て母に孝あり

哥仙下略

予は其角にその比はむらさきのゆかり有て其時半旅は我許にとゝまりて

しはらく衆鳥同林に遊びし又の一会も橋亭にて催せしその発句に

静さや二冬馴て京の夜

旅の千鳥の水は離れず

柳の喩に尽ぬ岩撫て

行懸りては降らぬ雨見る

其角

集加

我黒

泥足

轍士

鞭石

金毛

士」(海下六ウ)

之

角

其角

金毛」(海下七オ)

信徳

雨伯

たのもしき朔日風俗の軒並ひ

影うるはしく月の朝戸出

椎の実の盆にころつく愛にして

いつれ冷し外内人の膳

哥仙下略

この巻に普子か秋の付句に菊さけてやり手かひとり寺参りといふ句を先

師信翁」(海下七ウ) 感られし其節の風姿の秀逸ならめ是等の事を思ひ

続れば光陰はやく過去て多くは故人と成今残るものは鞭翁雨伯長丸我而

已

一風雪もことし十七回忌のよしこれも一とせ花洛に入てあなたこなた誘

引せし時

島原の外も染るや藍はたけ

降らぬ傘には櫛も涼しき

在明の山はこなたと口反りて

泥にて消すはうら枯の額

この巻は風雪発句に前書して一卷をみつから書て送られぬ誠に各古きす

さみと成し事陌上の塵にたとへしもむへなり此丹野は本間左兵衛とて舞

曲の達人世人知れる所也誹諧は芭蕉門人にてしかも作に足れり或時中元

の三つ物第三に月の船こかれ／＼て神崎へといたしぬ誠に是は神崎にと

留たらは」(海下八ウ) 一句おとるへし神崎へとならてはならぬ留なり

と其ま、桜木にうつし彫ぬ惣而頃日第三にかはりたる留とも見え侍り是

等も例なきにもあらず既宗祇独吟第三に

長丸

集加

轍士

泥足

丹野

風雪

金毛

轍士」(海下八オ)

丹野

風雪

金毛

轍士」(海下八オ)

丹野

風雪

金毛

轍士」(海下八オ)

丹野

風雪

金毛

轍士」(海下八オ)

丹野

風雪

山風にみれば花なき里もなし

宗 祇

藤ちりくたる谷の川波

小田かへす岸の下水音早み

かやうの留もあり此類の留いにしへの連哥に外にもあり又玄仍の七百韻（海下九才）第三に夢といふ字を恋にならざる事此類は悉く師伝有ていかにも道理明らか成事とも也此等の第三の留を見聞て第三はたけ高く平句の様にさへなければ何留にてもくるしからぬと心得たる人も有へし聊さにはあらずいかにもかはりたる第三にはそれ／＼の口授有ことそかし其理を伝授ならて凡を遠察し誹諧に取直し翻案（海下九ウ）する事大成了簡達にて侍り先哲の巻なれはとて用る事と用捨すること、あり宗祇肖柏宗長の湯山三吟には植物三句続たるを希代の事にいへりそれのみならず彼百員を新式に考れば初折の表に雪ありて裏に春の雪あり表に夜に秋をむすひてそれに露附同裏に夜に秋をむすひて又露付表にさそふありて裏にさそふあり其外十ヶ（海下十才）所あまりさし合あり扱三の表十四句めに松ありて裏の角に花有花に藤を附是にて植物三句続たり是名匠三哲の巻なれともヶ様二さし合多し是等はむかしもさし合と云今もさし合には紛なし古賢の巻なれはとて此類は手本にならぬ事也此外にも亡師より譲られしにしへの連哥の巻ともを見るにさし合多く見へ侍り其趣は（海下十ウ）むかしは宗匠のさし合を繰る事を詮とせず只句の善悪をのみ吟味せられさし合は執筆の役にて若は宗匠の外一座の功者詞を加へたりとそ又折／＼懺悔の会と云て指合をくはしく繰る言ありしよし其外は大方のさし合は見のかし懐格に能句の留る事を詮とし給ひし

と也只能師に随ひて其至る所を知へし（海下十一才）

一誹諧の風体時／＼にかはり行こと貞徳翁の時は平懷なる言葉にして誹言つよく聞え侍る既久留流の跋にも其旨にてきやしやなることを好まは哥連歌をしていやしき誹諧はいらざる事伊勢の望一かへとをつきよといへる句に丸か点したるを不審する人有その答に山崎宗鑑の狂哥にかしましや此里過よほと、きす（海下十一ウ）都のうつけいかに待らんと詠しにて悟り給へ行やらて山路くらしつ時鳥今一声のきかまほしきになとほと、きすを寵愛したる古哥を宗鑑かしらすしてヶ様によりみくつすへきかと長頭丸の書給ひしその、ち星霜移りいろ／＼に風姿かはりて今の誹風になれり風体は其時／＼に合するか能なるへしいつ迄も習ひ得し時分の風俗を直さすしては（海下十二才）当日時の古風と謂へし風骨のかはり行事は唐にも漢より魏に至る迄四百余年の間文格三度かはり猶唐宗元明の詩文其奇巧変態更に極なし哥も万葉より古今迄百余年風流変す仮令は万葉赤人の哥に田児之浦從打出而見者真白二衣不尽能高嶺仁雪波零家留と有を田子のうらに打出てみれば白妙のふしの（海下十二ウ）高根に雪はふりつ、と真白を白妙になしふりけるをふりつ、に改て新古今には入られたり是新古今の撰者赤人に越たる堪能にて改らるゝにはあらず時代の風体に合すへき故成へし風雅の時に随ふへき事は等を以て知へし温故而知新といふこと肝要なるへし

一菟玖波集第九雜躰連哥に誹諧有これはひたすら平懷なる詞にあらず又（海下十三才）連哥の中の誹諧躰といふは其迄の義にはあらずと也一貞徳翁季吟の席にて

前句 秋はらめるがなふるめしつき

我を君まねくかまねを篠すき

といふ句有門人公範といふものさかしらに夏は人まね篠のはのさやく霜夜を我独ぬると正しく詠し詞なれば俳言なく聞え待ると申せしに長頭丸(海下十三ウ)の答此哥古今集の俳諧にてあり此類はたとへ本哥を直に上を下へ翻案する計にても俳諧なりとの給ひしと師の書れたるものに有誠に尊き教へそかし今猶此心持は面白く覺へり元禄のはしめの比鬼貫独吟に

何かあたりてへとをつかる、

おく山に紅葉踏分啼鹿の

と致されたり是は俳諧哥にてもあらねとも(海下十四オ)猿丸太夫の絵姿を見立られたれは心の俳諧にて作に達し一興有事共也

一或時おにつら戯れになけふしの唱哥を作るへしとて夕へくは心のかよふと上の句をつくりて下は何と有へきやといへり予もされはと申内に惟然坊その席にありて何の苦もなう我等致したりとこほりくど確の音と申出されぬ一座どよみて終になけふしに夕へくは(海下十四ウ)心のかよふこほりくどからうすの音とは有ましき唱哥ぞと其座の花妓柳男暫く笑ひもしつまらさし誠に此惟然も無人の数と成今は八功德地の辺七重のうへ木の下にはねすの枯葉をみて水さつと鳥はふはくふうはふはとやすく吟し居るへし往事をおもひ出せる因にこれらのことまてそ、ろになつかしく事つらね侍りぬ(海下十五オ)

一立圃は奇艶精絶の作者也生涯の間の哥発句文など不残書集て六日の葛

蒲と外題して三冊に成してみつから筆を染られたるを予秘蔵し置りこの中に五戒に比らへたる俳諧の掟有仍此集の因に爰に出し侍りぬ

俳諧には五つの掟ありこれを背くは御仏の説法を破るかとし先発句には月花をそむきたる心をつくり(海下十五ウ)出名所旧跡をあさはかに取なし又平句にも前句によらざることをいひ一句の心も慥ならぬはこの道をころす道理にて殺生戒の躰也

折とるは殺生戒そ犬さくら

立圃

古き哥連歌を取とて本哥をその俤いひ古きこと葉を長くといひつ、けなどするは哥連歌ともに古哥をぬすめるとて嫌へりこれは偷盜戒の罪也

ぬすまれぬ花にや罪を作り庭

全(海下十六オ)

前句にしたしく付なし打越に心かよふは輪廻のまよひなれば邪淫戒といふ也

花くうつり心や邪淫戒

全

他の耳に入かたく不附事をいひてしらぬことをも知顔にをのれを立るは妄語戒の科也

うそつきや空にしらぬ花の雪

全

会席におゐて貴き連衆を敬す功者をも恐れす句数のまさらんことを口に任(海下十六ウ)するは飲酒戒をやふるといふへし

但恐れをなすには心得相違することあり下手功者として身をしらぬ人有をのれと偷盜妄語の戒めを破るなればよく見しりて功者とおもふへし

飲酒をも芝居やふりの花見哉

全

一紫藤軒も若年の比よりの作意共悉く書集て置れたるもの有様（混雜）（海下十七オ）して日録に同じき物也中にもいまた他の耳へ入さるものもやと思ひやりて爰に書記しぬ今はらや一字一涙皆陳迹と成てむかしの佛をのみ見るかことし誠に秋待えても秋そ恋しきとよめるもわか身ひとつにつ、まりぬ故人不可見倚杖役吟魂と有までも思ひつ、け侍りぬ

雪曙

淋しさはときる、迄そ山里の
わすれはてたる雪のあけほの」（海下十七ウ）

水無瀬川の辺に旅ねして

水無瀬川夕を秋とおもひねの
まくらまで来る波のしら玉

千鳥

しら玉も風にみたれてかも川の
浪たつ千鳥月に啼也

庵秋月

さもあらは荒にしま、の草の戸も
かこち白なき秋のよの月

閑居」（海下十八オ）

さ、竹のさよも更つ、降雨に
まなひやはてぬ窓の灯

試筆

捨はやとおもひたつ世も明ぬれば
又こりすまに九重の春

ある人隠元薬鑑と云ものを取

出して即興望まれけるに

そも菩提達磨味噌から乾せて

やくはんひとつは空にのみなす」（海下十八ウ）

宗易居士蛎から釜と名付

られたる北野興善院所持

自書付有その釜を袖にして覚々斎

の許に証文乞にまかりける即席筆

とりて書付給はりぬ折ふし誰か

れ有て塩辛やうのものにて酔わた

り帰るさに一首と望れて

早速に蛎から釜の御証文

うれしと我はにへかへる也

かへし」（海下十九オ）

今しはし喉のかはきをやめ給へ

それは蛎からこれは塩から

連歌試筆

山鳥の尾上まつしる春日哉

わか心なくさめ初つ花の春

玉と見る中に春立光りかな

千氏 覚々斎

言 水

若やくや水のこゝろも花の春
むさほりも世のことわりそ花の春」(海下十九ウ)

誹諧の部

鷹司前関白房輔公へめして

召題を下されて

花交松

家つとやさくらの歩む小松原

霞見る／＼引幕の内

おさな子のゆひさす帑鴛の山越て

漢土の一器御求その銘初雪と

有し御楽みは」(海下二十オ)

雪の炉や撫て其器も貴妃の肌

結は、比翼に鴛を三の羽

朝香潟帙の銀杏に風寒て

東御門跡一如尊の御前にて

つり初て蚊屋面白き月夜哉

きさかたに旅ねして

夜や秋や蟹の瘦子や啼鳴

宗祇の賛に」(海下二十ウ)

傘提てしらぬ翁そ村しくれ

霞けり日枝は近江の物ならず

住吉市

ぬは玉の夜声や菊に市女笠

朝鮮人來朝山科にて

枝柿の熟我國の孝を見よ

因州城主待／＼て

山窓も覗きつくしつ君か駒

この涼み汝かへらは入間川」(海下廿一オ)

神帰り其座や袖の花鎖

大井川にて

風塵の雲雀落けりふもと川

千句巻頭

何と喚く柳の花を人心

半面美人

朝さむや虫歯に片手十寸かゝみ

南都へ引うつるに

秋好む人に秋あるいつみ哉

奈良にて」(海下廿一ウ)

句を土産に二月の瓜はなし

鶯声うさぎの老やくりこと山かつら

道成寺にて

入相も旅僧追ゆる枯野かな

弘仁寺にて

初茸もあらは我袖花すゝき

春日里にて

折そへよ祇園寺もけふの酒

馬に鞍待てそよ春のうす曇り

且匂ふ庭や一すね枇杷の花」(海下廿二才)

父こふる母やむかしに虫の声

あつまやによるの情や鉢扣

初鶴や其代を今のこかね札

但初鶴冬師説

一集思ひ立けれ共先生程なく

うせ給ひぬれは第三にて止ぬ

太麻や笠も青田のひとつ杭

手向か袖をたゝむ蝙蝠

舞鶴の七年経たる封切て

この外数くなれは略之」(海下廿二才)

言 水

方 設

信 安

一当集に予か付句に久かたと計を月に致たり今迄も宗匠好士の久方と計を月に用ひたる作を未見聞然は初心の輩のおほつかなくおもはれけん仍師伝なれとも委述之

一久方とは根元応神天皇の後の衣の間より膝のすこし見えけるを月に似たり膝形と勅定ありしより月は空なれば空は遠きものゆへ遠きの心を久しと」(海下廿三才) 取なし形も方となし久方と書かへていにしへより天の類ひの枕言葉とはなれりとかやしかし久かたと計して月に用るの例

は古今十八巻に

久かたの中ををひたる里なれば

ひかりをのみそたのむへく也

伊 勢

これは伊勢か桂の里に住けるを七条の中宮のとはせ給へる御返しなれば后をは月にたとふれば光りをのみ頼み奉ると」(海下廿三才) よめり久かたと計よみて月にしたる証哥此哥の外になし久方の中に生たる里とは月宮に桂の木有ゆへに月の中にをひたる里と桂の里をよめり又定家卿久かたの中なる川のかひ舟いかにちきりてやみをまつらんとよめるも月の中の桂川也これは伊勢か哥より出たり又喜撰式に月をは久方と云天をはなかとみと云とありこれらの正説よく」(海下廿四才) 考知へき事也猶飛鳥井雅世の古今抄を予所持せり此事も要文に有

一枕言葉も数く有事世に知たることなからこれもそれくに来歴の有事にて譬へは鳥羽玉といへる根元は秦始皇の父莊襄王の時五尺の鳥出来りその羽の中に黒き玉有是を希代の事に申伝へて鳥羽玉といへりこれより倭にも黒きをいふまくら言葉となれり」(海下廿四才) とかや旦古式には夜ルをぬは玉と云髪をうは玉と云と有去ながら万葉にはむは玉の夜ともぬは玉の夜ともよめる然ルを天徳哥合にむは玉のよるのゆへたにまさしくは我思ふ事を夢にみせはやと有を夜ルはぬは玉とこそいへむは玉は別の物なりとて負て侍れとやむことなき哥合の判なれば末代の愚なる心にとかく申かたしと顕昭の給ひしと雅世の古今抄に委有」(海下廿五才) 誹諧に枕言葉をとる事此例にはあらねとも風雅の一体なれば其元をしらすしてたやすく思ひ誤る人も有へきと筆のつるてに書顯し侍るのみ

なを俳諧鍛練の上は故事来歴をも深く可考事也

一又無名の鳥に名の鳥を付たり是又師伝ありて殊連哥にては重き伝なり
仍くはしき事はは、かりて書つらね難し」(海下廿五ウ)

引句は

いかなる鳥か雨に鳴声

よるく月の月につれなき子規

宗 祇

この外兼載昌俚のかはりたる鳥を付られたるも有とも略之

此二品は予かこの集に付句あれば初心のうたかひをはらさしめんために
記し侍りぬ

一諸芸の中に舞楽音曲鞠などやらの類は当座に或は替られ或は譏られ
なとして後世に名を残す計にて是と」(海下廿六ウ) ことの勝劣を弁
ふへき様なし歌連哥詩聯句俳諧手跡などは万代にのこりて道を知たらむ
人は勝劣を知らねは殊に嗜むへき芸也正直の人は俳諧も正直に聞え邪曲
の人は俳諧も邪曲に成物にて恥しき事なりとそ師の記せられたる物にも
宗祇の伝へに天地をうかし鬼神をも哀れとおもはする道なれば努々」
(海下二十六ウ) 正直にあらずしては不叶事也語近人耳義慣神明
とも伝ればはかなき詞といひなからおもひ入て致すならば神慮仏意にも
納受有へしあり」(海下二十七ウ)

言の葉も散うかみけり奇妙水

増 動

文星入夜台 猿鶴亦悲哀

湖東田三舛稿

揮淚読遊稿 空余処士梅

名木の卒尔も秋の風情哉

秋のみか万里は近し波の声

風骨のかはらて久し松の色

昨今の世には化なし後の月

世の様や誰を目当に虫の声

世の中や薄の筆も振仕廻

花鳥の鳴りは残しつ後の月

消にけり風雅の露は夫ながら

此三句は追悼心あらね共因のこと

有てこ、に出しぬ

入梅や暦を半見あけたり

愚の鹿も空恐しや初あらし

万国の境をしるす氷柱哉

追悼

紅葉とぶけふはものうし鹿ヶ谷

菩提子も握り消たり露の玉

けふ淋し賀茂桂にも水の秋

言のはも葉草喩品露時雨

帙に入る梅檀の実の名や残る

書に残る名は白菊や塩干山

一とせをしたふや秋の勸学会

宵闇の物はかなしやくれの秋

和州郡山 葉 山

同 投 閑

同 杜宇山」(海下二十七ウ)

同 玉 泉

同 晚 翠

同 芦 川

同 不 僮

同 友 之

土州高知 色 山

全

全」(海下二十八ウ)

仙 貴 山

同 波 山

同 山 滴

同 山 雨

同 茲 夕

同 例 志

同 不 醒

同 山 井」(海下二十八ウ)

流れ行水も物いへ露しくれ

同 而又

大ひえに飛んで狐雲や秋の水

同 茂山

黄色なる梅のは、そやてる泉

留願寺竹林院 竹 叟

手帳に見るまほろし古人の梯

宿札の跡ふる霧やかゝるかも

羽州最上山形 花 郎

先師の一周忌を弔ふ

おもひ出す類ひやはやし藤落葉

言 石

明らけき道に感あり玉芙蓉

英 竹「(海下二十九才)

一紫藤軒言水居士解脫一路名号帆 木枯果有兔海音と普く人口に膾炙せしも亡師今は弘誓の棹を採て清波を撥て彼岸に泊て此句を安く吟行あらんと思ひやりてこの廿一字を雀冠にして且中の七文字の頭に置いて英才好士の佳作を乞て手向となしぬ」(海下二十九ウ)

紫解 椎ふるや実御経にも皆吾子

暮 四

マメカ 藤房の脱る、秋松や枯

知 石

軒に立ッ一もと菊やもの、果

信 安

マヤキ 言種や路に枯の蔓も有

霍 洲

水に秋名聞利養夜也晁

羽 紅

居易か師と号ん菩薩有の海

輕 人

士号有り帆船に祭る菩薩の音

方 設「(海下三十才)

一後二条院御宇冷泉為兼卿彼島にして詠作卅三首の内二首は卅一字の雀冠に有又上五七七は短哥となり下ノ七文字は文字くさりとなれり并六字名号哥によりて嘉元二年に都へ召かへされ給ひぬ自筆をは後に宇治の宝蔵にこめられしとなんこれらの賢作に比らへて誹諧のほくをあらはせる事は嗚呼かましき業」(海下三十ウ) なりかしされ共追悼の因なれば罪ゆるし給へと阿弥陀の三字を中に置いて聊微妙の句にはあらねとも只十六句を組入くさりにして独吟の愚作を追悼とし并六字名号を折句にして秀才詞友の佳句をもとめて三遍の廻向となしぬ」(海下三十一才)

梨むかは中や絶なん名対面 氷 花
昔かな紫和泉梅紅葉 市 貢
阿なたうと鶯宿梅に秋の月 正 元
水音や茗荷の盛り右左 可 耕
立秋や伊達に散行瀧見腰 辻 潜
仏狸かも仏の素景仏の齒 方 設
仏に齒をあらはしたるは稀にて
靈山の齒仏のみとなん」(海下三十一ウ)
日有て花下にさすふ所は京極の一院疎影一基を輝し二十五菩薩石面に列りまのあたりの来迎引接ならしむるやといさ、か懷を句々に賦ものして本式の一折に成ぬ

勢至 天冠を梅にもかさせ石畳

宝蔵 宝蔵殊に縁る柳篁

宝月 姫に佐保。雨月を漕は栄なくて

日蔵 日がな一日雑談か旅

金剛 押入を捜せは和琴香の物

文珠 兄より加筆文字ゆかます

獅子吼 是程の肥肉くらふ山乗殿れ

地藏 花く紅葉掃除不掃除

陀羅尼 小調市をだら荷序にことつけむ

薬上 元暦常住飛切つた泌

珠寶 ムギ岐ほとは衆方規矩にてなひけたり

無尽意 無心いふさへあるに舞ぶる

金剛蔵 ふつて出る袖はこんがう草履取

薬王 杓横柄に届く也けり

日照 行雲の毎日簾に追る、は

月蔵 喧嘩馳走にする市の月

虚空蔵 稲をこく有雑無雑の中に児

華嚴王 一期の首途蹴込黄金

普賢 見て化粧ふ元氣は尽て恋の山

仙海会 恩に喜撰か家の集炬

蓮花王 それ嘔うそちらそれむけ王の鼻

宿王 名はあひの宿往古より汁

輕人 方設

人〔海下三十二才〕

人

設

人

人

設

人

人

人〔海下三十二才〕

人

設

人

人

設

人

設

人〔海下三十三才〕

人

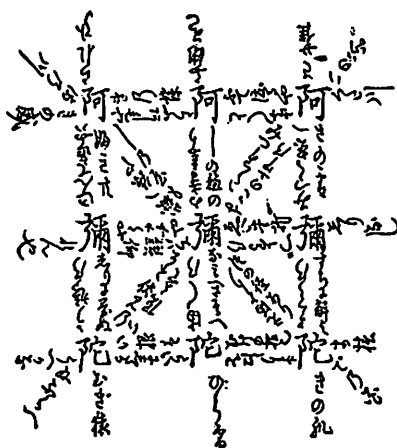
人

宝性 夜討曾我宝生ふたつかへり花
日光 千人の翁日光の炭

設

人〔海下三十三才〕

方設



人〔海下三十四才〕

一予点式今度改正して亡師より譲られし花押をこれ迄の点数五十点までに用之七十点已上は予か点格とし改る所左のことし

長

桜

鶏明

西湖

北州

南極

是迄言水花押也（海下三十四ウ）

桃源花

香炉峰

雨奇晴好

紅花白玉

玉海千尋

明鏡止水

宇宙第一

但秀逸^ラ色帟ニ書貫

右

言水堂金毛齋

方設（海下三十五オ）

南部の門人師恩を謝し皆悲哀哭踊し心喪を服して一周忌を弔ふ各一句を
備へしを鼓山叟より一章に書つらねて到来せり誠に深重の心さしそのま
ゝにうつし侍る

秋風や有為から無為に一またけ

南都菰仏寺 良 長

紫藤翁一周忌

南天の見はてし夢や一めぐり

梅 七（海下三十五ウ）

風の終もけふはさいたら島の噂

にて

荳株も露は咲けりけふの萩

八百風

過にし人のことを思ひて

員読ノは要の露も散ニけり

一年を耳にいまたし女郎花

既に世の散葉願れ冬牡丹

言のはの露便宜なし秋の色

石に花咲露のみの手向たり

甘干の軒は更なり一しくれ

一休の跡をしたひて寂光の都に

入給んことを

過去よりの時雨姿や都ふり

初霜は消て我も有草の色

言の葉の照りや次第に甘みさす

その杖の跡や蓋せず梅紅葉

門人志を出して紫藤翁の手向を

撰むなるも心に任せぬ業し有て

や空も時雨もことしの木の葉か

く比に成ぬ漸其集の名のみ伝ふ

る人にすかりて

文筆の海の音聞寒さかな

奉追福

木からしの脱ふく暮や一周り

右

東 志

可 任

一 貞

嵐氏 吟 風

一 簀

其安舎 藤 可（海下三十六オ）

和風軒 隨 志

一子軒 味 文

岡車軒 友 志

東風軒 花 誘

巴童斎 一 桂（海下三十六ウ）

四七軒 鼓 山

右

右

右

右

右

右

右

右

右

右

一族のたむけは

おなし枝や菊にしほみの遅速有

いへは元に会仏計や袖の露

尻に紫藤軒端の手向哉

三笠山去年見はてぬ秋の霜

言の葉はその倂や菊の比

月影の海に随ふなこりかな

世は竿のきのふの柿も枝葉哉

言の葉と残す手向や菊の水

木からしのはてやそのまゝ法の声

口授口決を得しことを思へは

其言の中に夾む銀杏哉

礼嬉しくも吹はやす鳩

水筋に後の光りをたのみ来て

人の死する時にいふ言よしと水

翁生前佳作指を屈するにいとま

あらず嗚呼おしむへき風才今梅

樹下の一基は誹人巾を湿すに堪

す当時号して随涙碑と唱せんも

宜なるへし

その色を石にこほすか梅嫌

市中に近き鐘をしむ秋

池西 陸 程

同 苗 良 則

村井 宗 故〔海下三十七才〕

今井 松葉軒

村井 又 水

方設 作 亀 水

定 次

言水娘 類 女

同 元 女

方 設

元 女

類 女〔海下三十七ウ〕

宿り鳥的の影とも月満て

淡しき所味は実く

舌耕に竜の宮古も掃払ひ

例の龜相を彼はなし鯨

ウ扇にてうけて流すは夜の蜘蛛

めつたに油臭い小座敷

お若衆といへはまじめに成て読

糞にへたてあらて妻帯

藪静鳴習ふ羽の愛らしき

三日路ほとを至極にて肥

神代より名のなき橋はなかりけり

母はしらぬひ関か関産

月うすき村の仏事の贈り膳

杉戸の桔梗彩色は未

愀気する時に花子の伝受有

角落せはしこ、か指占

二染て来て北向雁の小野、奥

令法橋日の瀧は涼しき

灰と成蜆の曇り当を呼

汝賊々汝賊々

堂塔を四百余州に建ぬとは

萍さそふ結納もなし

市 貢〔海下三十八才〕

放 夜

可 耕

正 元

執 筆

安

設

貢

夜

耕

元

設

安

夜

耕

元

貢

安

設

耕

夜

貢

矢のほしき篠弓に螢射ル思ひ

乳まで足は星の存在

駕籠雪車のそこらあたりは胡椒の香

道を学に美き山茶花

あさもよひ奇麗好から川の月

見送る笠の霧に咽たり

ニウ 朽株の注連に聳へて肌寒し

劔に比丘尼を追ふて毘敷

目つかひも霞か関の二屋形

何やら飲せ蜜也けり

ふせて置廿日そ我は花の主

解るけしきは山の黛

かとの外法の車のめくりくゝて

一周忌のいとなみ浅からぬこと

はの水手向草の数く当貴在す

かことし誠にたま滅してたま不

滅人也空空也人花咲実結ひなし

といひ有と云いつれにかと、ま

らんや

回文

けふそとや御法ありのみ宿そ更知^{寸松家}石^{寸松家} (海下四十ウ)

うみの音と聞はことは水の落

元

設

安

夜

耕

元 (海下三十九ウ)

貢

安

設

耕

夜

筆 (海下四十ウ)

あつまるといふにやうはさの程

は袖にこほれてその人はいつ我

はいつ

見しやそれ奈良か稲荷か鹿紅葉^{京都杉本}路^{京都杉本}通 (海下四十一ウ)

古人云光陰如箭始知宣哉吾師言

水遊於南都之日託于同志而得連

綿百韻矣熙々焉謀銀諸梓未成而

卒予繼其志加海音之末謂事異而

遂其志則一也為志滑稽者夜途北

斗霧海南針乎誠々如箭々々 (海下四十一ウ)

見かへりの寐覚の京や松の花

錦を期する袋うらやか

盆^{タケ}調の山も笑ひて風呂さきに

砂の文字の点をことふく

蟹の子の髪は黒きは稀にして

なつけど栗鼠は豊こはかる

方円の窓に万里の雲の月

そ、ろに秋の轍うれしき

ウ^{ウツ}赤電子の照時たより待ぬらん

痞分^シにて帯のもやくり

山の尾のうら有底意裏に立つ

言水

鞭石

晩山

遠山

埤動

方設

貞佐

信安 (海下四十二ウ)

知石

巨口

放夜

わつかに流れ養ふに足ル

松杉の中を鳧鐘こほれ来て

初丁撮ンたはかり捨置

しなたれて見せて諫メてくれにけり

鸚鵡といつば浮橋の神

のりもので廊出たるもいさや川

塩筥にさそふ月の中くみ

虫の音の絶間をたそと利口ぶり

三曲の手を伝ふ平調

軟障より七尺去て花をこそ

嫩い恩案はむらさきて替

帰雁行ならへはうらむ管筵

泥すらかせて嵯峨の年切り

ゆるくと肩を入たる手束弓

青貝よろつ茶臼也けり

蒲鉾に左官の沙汰も風渡る

賦せよ詠よと美しき山

細う降雨のはつれの杜若

まくらも白く改めて寐る

前垂に牽れて牛も嬉しいか

庭に幾年替られつ吹ッ

借シ傘のかへり今、日昼の月

市貢

可耕

羽紅

暮四

執筆

道山(海下四十二ウ)

秋翠

桃隠

郁磨

其諺

青輔

旭水

松枝

梅色

盛秋(海下四十三オ)

一古

一壺

居林

正元

芦沢

芦夕

優士

小鷹の供奉のとりまはす船

菊の香も仁王三郎さしこなす

五風のあした竹にたのしき

ニラ口に手をあて、そおしみ笑ひける

竈に媚るか後藤さあもん

壁に橋池に階子をかけまくも

寐耳に雫錦帳のをと

地黄煎て歯をぬいてやる心き、

風あらし日は景を鎖る

ちきり初色も浅香の花かつみ

もれて古今に赤人の化

神職の背中はつねに笏有

麁相に明て竹の露霜

へたて紙母にはいらす後の月

かなしがらすかおもしろき鹿

内外の井に良香は朝の花

まことに此さき此うら霞

ミラ 閏ある三月尽の裾のふき

踵をかくす狛兎の帑

宮殿の事はしらねと花未、央

蚊帳借りながら長者願する

この岡へ手にとるやうに出帆入帆

菅丸

赤井(海下四十三ウ)

桃葉

遠山

晩山

鞭石

言水

信安

知石

秋翠

貞佐(海下四十四オ)

羽紅

居林

市貢

可耕

方設

暮四

正元

其諺

一壺(海下四十四ウ)

論動

松枝

阿女に囁れ過分なる跡

こひ男七人竹に住たがり

かけたてまつる謎は何く

おとしたといふも繁多の水に酔

くるや秋の、だんくく駄ニ

香とむる髭にものほる蜚

窓をひらけは絵の松へ月

弓取の御用西瓜に召れたる

舟行水の七里ゆらく

三ッ再興の仏拜んで漆まけ

法論味噌か棒をひたすら

ひめをきし娘に頭痛とかや

よしや芳野、葛家うらみそ

見残しのまた寐を奪ふかつほ鳥

義をすへつたる数妙の唾

世のそしり阿波に浪なし勝角力

穢多の和讃の萩を吹こす

孟蘭盆の名代をかへて二百両

ちよとさはる袖蜀へ入月

汐風に雪舟やうの額つき

天井もかな鶴に俎箸

饒別の花に牽せて嘶ふ也

旭水

青輔

放夜

盛秋

芦沢

晩山

一壺〔海下四十五ウ〕

暮四

逍山

其諺

遠山

旭水

秋翠

貞佐

梅色

言水〔海下四十五ウ〕

方設

松枝

盛秋

羽紅

鞭石

秋翠

草芳しく薄う着て見る

名恙なう加茂の御棚の山かつら

饅頭に降る童子也けり

鶏のしとねにあかる後京極

その斧の柄の焦る奇楠わり

さ、やきも大津の湖を空に聞

邪正一なり鬼の念仏

囁は飛くはゆれはゆく月は秋

指南車よりもはやし稲春

鶴鶴の七度た、き句は出来ル

浅い事にて深く思はれ

逢ぬ夜の甘い物なら番椒

誰か脱そやこ、な連着

し、てゆく猫はかはゆき塔の隅

莖の圧石を家子待てとる

名ッうれしきは寐る夜初雪夢に富士

志賀から祈る黒主の宮

年ふれはかしらの髪もゆり輪すれ

ひや、かに抱り六月の鷺

なてしこの御壺の愛もとをく来て

扇の恥をす、け万歳

君見よや花の玉ふさ井手の玉

信安

逍山

一壺〔海下四十六ウ〕

居林

其諺

信安

言水

盛秋

晩山

知石

可耕

鞭石〔海下四十六ウ〕

信安

遠山

逍山

方設

秋翠

其諺

青輔

言水

正元〔海下四十七ウ〕

鞭石

をのくしたふ墨にはひ鳥

知石（海下四十七ウ）

海音集巻終（海下四十九オ）

まことや海音の一緝は世に誹灯

をかゝくへしの器也とせむやあ

ふくに言水翁師の俊名凡五十ヶ年

余天下の翫美たりことし方設子

師門の徳を追ふて集尾に十三夜

の喩を加ふるの微意はしらすと

いへとも需にまかせて先年牛祭

の案内有て紫藤軒に翌日かたら

ひしを思ふに

またも月昨夜木のしま広隆寺

海音集なかはあまり調ひてこゝ

ろ晴たる後の影を見はやなどゝ

言水堂に招かれ水色予三笑の醉

をしたふ

さかつきに後の校合影や今

共に酔時の吟

染か出来て仕立かゝるや後の月

橋にて

淡と成湖は富士より後の月

享保八辛卯年孟冬中院

京掘川四条上ル町松葉軒

書林 今井十左衛門板（海下四十九ウ）

追加

紫藤軒五十哥仙の追加に出され

たるをおもひ出て

的場あり千本堤われもかう

ねくらへ運ふ塵をつくみの

露の秋五花の蹴定むら卒

月夜の匂ひなれや峰の灯

水を掃はとの御通り一嵐

蛸を料理袖はみしかき

紅の綱にこたふる勢撰ひ

のりもの下りす影は山の井

うひひ晴の世上へ鳴て手は痛

千々の埃と拭ふ矢の霜

当麻にて出合ふ約束桃さくら

暮四（海下四十八オ）

水色

方設

淡々

大圭

設（海追加一オ）

色

圭

淡

色

設

淡

知石

水色（海下四十八ウ）

言水堂

海雲に額打なやむ咲

二度嗅て我は喰へし岡の声

た、き土にていやらしき簀戸

一艘に目利業利唐使

箕に降音を聞夜有あり

苦口の上に顔きる金剛草

垂のひま洩り蝨吹裾

日は夢に入てつめたき九月哉

漸く蒼む太刀持の膝

帆を通る鳥井は花の満る時

春おしみつ、夏ものを待

二驚も使へといはす畑手代

更行ま、に乾く尼の齒

胸あはぬたとへは岩に巖石

当時膾をもらす草書

白洲賀に昼の灯明うちつかぬ

猛ッて蟬の湯をさましたり

石路の葉を独樂に一先人の上

中／＼景にまくるさけ重

逆さまにしのをつきたる笹の雨

剃て衣を着せて窓より

春、寒秋、暑うきを越路の崩機

圭

設

色〔海追加一ウ〕

圭

淡

色

設

淡

圭

設

色

圭〔海追加二オ〕

設

色

淡

設

圭

淡

色

圭

淡〔海追加二ウ〕

色

けふも愚に暮る、藪持

しやんと埒海に花稻咲みたれ

とりつたへたる烏帽子にて月

ウ往々といふて一馬場実秋は

何折たそ目へ油煙来る

付ヶさしの影はつかしき重四十

扇を横に笛のうら風

平懷は他人の見出し夕ちとり

仏師もつれて下る此殿

当名干ぬうちか賞翫花の雲

林檎蒼て見栄ある宿

設

淡

色

設

圭

色

淡

設〔海追加三オ〕

色

圭

淡〔海追加三ウ〕

海音集成夫編之者誰也金毛齋方設撰焉止々齋麒麟風作序以與是其

（海跋一オ）言也至矣尽矣謂余曰紫藤軒言水以壽終矣誹名曰乎世美

句驚乎人（海跋一ウ）群生伸追慕之情交友致慘怛之思而作句聯

語以呈其意趣輯之錄之（海跋二オ）雕梓而以貽後世蓋繼其系

統者乎示余乞跋余倭歌誹林雖未學曾祖（海跋二ウ）貞德以是道

伝重頼重頼又伝言水則非莫所以也不能固辭因以書（海跋三

オ）

講習堂人昌迪誌焉

「印」（「久敬」）「印」（「昌迪之印」）

「」（海跋三ウ）